



TITLE:

ゾンバルト教授の百貨店観

AUTHOR(S):

堀, 新一

CITATION:

堀, 新一. ゾンバルト教授の百貨店観. 経済論叢 1932, 35(3): 449-454

ISSUE DATE:

1932-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130217>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論經濟

號三第

卷五十三第

行發日一月九年七和昭

論叢

滿洲國稅制及其批判

法學博士 神戸正雄

時差說覺書

文學博士 高田保馬

船腹過剩問題の意義

經濟學博士 小島昌太郎

時論

沿岸漁業者問題

經濟學士 蜷川虎三

研究

中央銀行の獨立性より見たる政府貸上金に就いて

經濟學士 松岡孝兒

總體經濟と個別經濟

經濟學士 大塚一朗

幕末の財政紊亂について

經濟學士 大山敷太郎

ゼウエーの統一貸借對照表について

經濟學士 熊本吉朗

說苑

爲替相場變動の原因について

法學士 正井敬次

企業豫算制度の米國に於ける現状

經濟學士 山本安次郎

ブルタン氏の國家收入論

經濟學士 大谷政敬

ゾンバルト教授の百貨店觀

經濟學士 堀新一

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

ゾンバルト教授の百貨店觀

堀 新 一

ゾンバルト教授の百貨店觀を主として彼の論文(Das Warenhaus ein Gedanke des hochkapitalistischen Zeitalters)に依つて

第三十五卷 四四九 第三號 一五一

考察して見たい。本論文は我國に於ても二三の人々により引用されて居る。然しその全面的紹介は未だなされて居ない。

ゾンバルト教授は先づ百貨店の本質を定めるに當つて、百貨店發生前の小賣商の情態に一瞥を與へ、その對照物として現代の百貨店を見た。そして彼の研究の總てを一貫するものは、經濟精神・經營情態・販賣技術の三方面を通じて見たる經濟事象の歴史的統一的把握である。彼は百貨店の存立條件に就ても考察してゐる。然しそれは資本主義企業一般の存立條件に外ならない。私は以下この順序に従つて彼の見解を考察する事にする。

一 百貨店發生前の小賣商

(一) 經濟精神 この時代の小賣商の經濟活動の基本精神は、他の手工業のそれと同じく、生計の資を得んとの考 (die Idee der Nahrung) に外ならなかつた。かの Zunft 制度の如きもこの精神の表現に外ならない。全ての經濟活動は身分相應の生計の範圍に固定されて居た。販路及び價格の一定は當時の營業上の一大原理であり、之を破る事は法律上道德上禁ぜられて居た。顧客爭奪・價格の吊上引下・營業廣告は總て非難すべきものと考へられた。靜的固定的經濟が當時の一般的經濟活

動を支配して居たのである。

(二) 經營情態 この時代の小賣商の經營情態も、上述の手工業的經濟觀念に基いて定められる。その經營は一般に小さく、その大きさは皆一樣である。使用人の數も少ない²⁾。従つて使用人と經營者の關係は、手工業的家族的關係で支配されて居た。小僧は番頭に番頭は主人に昇進の道も開けて居た。更に顧客と販賣者間にもこの人格的關係が支配した。そして之は或意味では百貨店の起源とも見得らるゝ十八世紀の贅澤商品にもほど妥當する所である。

當時の商業教科書は各人の才能個性に依り個別教育をほどこすべき事が記載されて居る。商品の價格も顧客に依り異つて居た。又この人格的關係はその取扱商品にも見る事が出来る。この時代に小賣商は夫々専門店に分化した。然しその商品配合法は販賣者の便宜觀に基いたもので、あらゆる使用目的の商品を一店に集合した。

いま當時の専門商の取扱商品を分類して見ると(1)評

- 8) Sultan, A. a. O. S. 5. 3. Bemerkung. (G. Calms „Volksw. Theorie der Staatsausgaben.“)
- 9) Sultan, Staatseinnahmen, Beiträge zur Finanzwissenschaft I.
- 10) Vgl. Max Scheler, „Probleme einer Soziologie des Wissens“ in „Die Wissensformen und die Gesellschaft.“ Leipzig 1926.
- 11) Vgl. Sultan, A. a. O. S. 2. 1. Bemerkung.

量商品 (Pfundwaren) (2) 評尺商品 (Elenwaren) (3) 評數商品 (Waren des struckzahlen) (4) 古物商品 (Altwaren) となる。

そして、これ等の分類の基本原理として作用するのは、(1) 生産物の素生 (例へば内外品の別) (2) 生産の場所 (例へば支那品・伊太利品) (3) 生産部門 (例へば絹物・ガラス品) の三である。そこには未だ高度資本主義時代に見る合理的非人格的配合法は表はれて居ない。

(三) 販賣技術 當時の販賣技術は頗る幼稚なものであつた。計算書を作る事もなければ、別に店舗を裝飾する様な事もなく、店は何時も小さく暗く冬は寒かつた。飾窓の如きも勿論なかつた。暗さが店の内外を支配した。秘密價格主義!!。そして『商人秘密帳簿の附け方』は、當時の商業教科書が幾章も振當てた重要事項であつた。

二 百貨店の本質

百貨店の本質は之を前述の前期資本主義時代の小賣商と對比せしめる事により、最もよく了解出来る。何

ゾンバルト教授の百貨店觀

故ならば、百貨店は高度資本主義時代の純粹典型の一であり、前期の小賣商形態とは全く對蹠的地位に立つものであるからである。

(一) 經濟精神 高度資本主義時代に於ては、あらゆる經濟活動の基本精神は純資本主義的であり、利潤獲得がその最高動機であつて、前代の如く生計の資を得んとする爲ではなくなつた。資本主義的企業の勃興、株式會社の創設等の如き、この精神の具體的表現であり、その小賣商業に表はれたのが百貨店である。されば百貨店に於ては、この最高目的に適するあらゆる方策がとられる。販路擴張・因習打破・經濟的合理化、そして廉價多賣 (Kleiner Nutzen; Grosser Umsatz) は百貨店の最も重要な一の本質となつた。生産費減少および資本回轉促進のためにする大量仕入・直接購入・休日大賣出し等、今日百貨店に用ひらるゝ種々の營業政策もこの基本精神に即して考へるとき始めて十分に了解出来る。販路擴張は必然的に「競争」を生む。そして今や廣告は百貨店經營の生命となつた。これは販路の

- 1) 例へば松田愼三著、デパートメントストア、10頁以下。平井泰太郎氏、百貨店形態の性質(經營經濟研究第七冊)
- 2) たとへばブレスローの如き都市に於てすら1858年に518人の企業者に対して818人の被雇傭者が存在したに過ぎなかつた。

固定が要求され顧客爭奪が道德上法律上嚴禁されて居た前代——靜的經濟 (Statische Wirtschaft) の時代には見得ざるこの時代の本質的一現象である。

(二)經營情態 百貨店の經營情態も前述の基本精神により定められる。これに三つの傾向がある。膨脹傾向の外面的表現たる(1)經營擴大の傾向及び之と區別せらるべき經營集中の傾向。もつとも小賣商業の集中傾向に就てはゾンバルト教授は寧ろ消極的見解を持して居り之はまた屢々問題となる所である。以上は次に述べる(2)合理化傾向と共に資本主義時代の一般企業に共通の傾向である。然し百貨店に於ては更に(3)商品新配合の傾向がある。既に述べた如く前代の小賣商は、販賣者の便宜により商品の配合分類を行つたがこれに對して十九世紀の頃から一つの新傾向が生れた。購買者の便宜のため即ち使用目的又は需要の觀點からなざるゝ配合法これである。之を最初に用ひたのは往年の贅澤商品であつた。そして一方に單一需要商として發展しつゝ他方に各種の商品を一經營のもとに集めて居る

のが現代百貨店の姿である。即ち前代の混合商を“Thèse”とせば近代の進化せる専門商はその“Anti-Thèse”であり百貨店は“Synthese”として考へる事が出来る。更に進んでこれ等の傾向の根柢たる先述の合理化傾向または非人格化傾向に就て一瞥しよう。この非人格化傾向は三方面に就て見る事が出来る。(1)販賣者と顧客との關係 (2)經營構成員間の關係 (3)販賣者と商品との關係。

我等は今や往年の小賣店に於ける如く、百貨店の店頭にその主人を見出す事は出来ぬ。否やがて監督者賣子すらも店先からその姿を消す時代が来るであらう。そしてたゞ幾千といふ數字のみが客に接する。前代の經營内部に見た家族的關係も今や消滅した。主人は自分の使用人を、使用人は多くの他の使用人を見知らない。成程福利増進施設もあるが、其は決して往年の親密な關係を回復するものではない。商品が交換價値の體現物としてより意味を持たぬ現代に於ては、主人・監督者・賣子が何等商品に愛着を持たない事は勿論で

3) 例へば松田慎三氏、百貨店の地方進出(企業經營第六卷第四號)

ある。非人格化傾向!! これはこの時代の百貨店經營の總てを貫いて居る。

(三)販賣技術 現代百貨店の販賣術は大衆の前に商品を解放する事にある。『より明るく!』これこそ百貨店の内外に通ずる販賣の最高モットーである。莊大な明い建物は往年の薄暗い店舗に代つた。定價表自由選擇主義が前代の秘密的情實的販賣法に代つた。そして機械化・自動化・非人格化・現金制度等の所謂明い販賣は往年の暗い販賣法を驅逐し、販賣術に一大革新を齎らした。

三 百貨店の存立條件

百貨店が高度資本主義時代の一典型物たる事を知らば、その存立條件もまた容易に之を知る事が出来る。これ等の條件が充されたのは、十九世紀に入つてからである。そして我等が百貨店の起源を見たのも亦實にこの時代である。⁴⁾

(一)資本主義的企業發展の一般的條件⁵⁾ 資本主義的

ゾンバルトの百貨店觀

企業發展の一般的條件は同時に資本主義下の一存在物たる百貨店の存立條件をなす。これに三ある。

(イ)大資本の存在 百貨店の存立には先づこれに必要な大資本の存在、その前提としての社會の富の増大・資本の集合分配管理の爲めの金融機關及び株式會社の如き資本集中の方法の確立が要求さるゝ。(ロ)有能なる經營者及指導者の存在 近代企業に必要な専門家販賣人財政家のうち今日の百貨店には後の二者が存在する。(ハ)勞働階級の存在 十九世紀に於ける人口の増加及び經濟情態の變化に基く失職者の増大は、この要求の充實を容易ならしめた。特に今迄食卓の準備や家内工業の助手をして居た女子が、勞働市場に表はれて來た事は注目すべきである。何故ならば女子勞働を最も多く要求するのは百貨店であるから。一九二五年の統計では、獨逸百貨店勞働の七三、六%が女子勞働で充されて居る。

(ニ)生産技術の進歩 生産技術の進歩は、一方に出來合的慣習的商品の販賣を増大するを得しめ、他方に

第三十五卷 四五三 第三號 一五五

- 4) 普通百貨店の起源は1852年フランスの Bon Marché とされて居る (Nystrom; Economics of Retailing V. I. 127頁)
5) 松田愼三著、デパートメントストア、10—17頁)
6) 都市と百貨店の關係に就ては Doubman and Whitaker, Department Stores, p. 10 以下に詳しい。平井泰太郎氏、百貨店の現在及び將來 (國民經濟雜誌 第五十卷第一號)

建築術の進歩を促した。更に鋼鐵・ガラス工業の進歩も、百貨店の重大な存立條件をなす。若し今日の百貨店から、かの莊大な建物・華麗な飾窓を除いたら、果して何物が残るだらう。

(三)交通及び都市の發展⁶⁾ 鐵道・電信・電話の發達は必然に都市の發達を齎らす。そして都市こそまさに百貨店の肥沃地(Nährboden)である。交通機關の發達は更に郊外の顧客をも引付ける事が出来る。各種郵便施設・運送機關の發達も百貨店の存立を助けること勿論である。

これを要するに、我等は百貨店を高度資本主義の一嫡子として考へる事が出来る。其はこの時代の本質とも云ふべきあらゆる特質を具有してゐる。百貨店の存立條件も之に基いて考へねばならぬ。更に百貨店に關するあらゆる判斷も亦これに基いて爲さねばならぬ。勿論百貨店が祝福さるべきや否やは科學の關知する所に非ずとするも、その現状・將來・特質を研究せんとする者は各々時代の本質を把んで、これに基いて判斷を

下さねばならぬ事は云ふ迄もない。

以上述べし如く彼の百貨店觀は、彼の歴史觀に基礎をおき發展的方法に基いて構成されて居る。彼は百貨店を一切の關聯から切離して考察しようとの企を抛棄した。そして資本主義の發展的關聯に置いて即ち資本主義社會の一機構としての百貨店を考へた。其處には從來のくどくしい總ての説明からまぬがれる事が出来た。何故ならば百貨店は全く他の企業と同様に、資本主義的一企業に外ならないから。そして資本主義的企業一般の原則は、その儘百貨店に當はめる事が出来るから。

かつて百貨店に不景氣なしと豪語されて居たその百貨店が、今や資本蓄積の進行と之に伴ふ民衆購買力の減退⁸⁾より来る收益減少⁹⁾の事實に直面して喘いで居る姿を見る時、百貨店もまた資本主義企業の外に超然たり得ざる事を痛感する。そして其處に我等はゾンバルト教授の百貨店觀の意義を見出すのである。

- 7) 前波仲子著；小賣店の新戰術 17頁、松田慎三著、デパートメントストア 87頁以下。
- 8) 日本經濟年報(昭和六年第二四半期第五輯)、179頁。
- 9) Boris Emmet; Department stores; Chapter 1 以下、東洋經濟新報、1473號、我國百貨店の利益率は昭和三年下期以來低下の跡のみを辿る。